ことぶき「なか」だより
No.201
2022.11

発行所　日本キリスト教団　なか伝道所
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 205
Tel.（045）671-1109
振替　　00200 － 1 － 47369
E-Mail : naka-ch@hb.tp1.jp　　HP：http//church.jp/naka/
発行者　なか伝道所／編集委員会　　（題字　松橋 順）

宣教方針
① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
② 地域の問題に関わる。
③ 諸教会に呼びかけてゆく。

集会　主日礼拝　日曜日（第1・第3・第5）
午前10時30分より

第201号　　寿に立つ　②

200号、201号では、なか伝の大切な宣教方針にも関わる寿の町で、何らかの活動をしている、またこれまでに活動してきたメンバーに、主な活動内容と、なか伝とのつながりについて記してもらい、もう一度寿について考えたいと思いました。

「ひとが寄せられる寿の町」
寿地区センター　汀なるみ

日本基督教団神奈川教区寿地区センターは、その名の通り神奈川教区の特設委員会の一つとして三十年以上前から寿地区で活動しています。寿地区センター二十周年記念誌「いのちの灯 消さない」によると、歩みの始まりとして社会福祉小委員会が一九八〇年代の初めから、この地区の問題の学習、バザーや越冬炊き出しの支援などに関わりはじめ、日本社会の中でも特に「多くの問題のしわ寄せを受けている寿のような地域」を、宣教の課題の中に位置づけて行われなければならないという認識が生まれた背景から、一九八三年に教区社会委員会の中で「寿地区問題小委員会」が設けられ、並行して地域の住民活動団体の連合体である「寿地区住民懇談会」からの障がい者が共に手を取り合って自立していく手助けをする人物を「指導員」として送ってほしいという求めにより教区内の体制作りが始められました。その後、紆余曲折を経て多くの方々の知恵と支えと祈りのもと、一九八七年には活動センターの設置に至り、寿地区の諸問題への活動と地元の信頼を前人の方々が育んでいきました。

現在、寿地区センターの活動として、寿バザー、ことぶき福祉作業所の昼食会、日常的な相談なども行い、地域の各種団体との協働で、寿炊き出し、夜まわり、寿夏祭り、寿越冬などがあり、取り組みのなかで寿地区の諸問題から明らかになる事柄を諸教会や団体・個人に伝達して、必要とされる担い手であるボランティアと献品・献金の呼びかけを行っています。

直接支援としての関わりだけでなく、寿越冬では実行委員として行政交渉や寿プラザ地区地域防災訓練など地域自治に参加し、また、寿炊き出し体験と町歩きや現地学習の「寿わーく」を通して寿地区の成り立ちと現状を個人や学校・団体が現地で学べるように取り組んでいます。

このように項目だけをあげてみると味気のないものになりますが、独居の生活者が多いこの町で、寿炊き出しが緩やかなつながりをもつコミュニティとしての機能をもち、寿への固定観念を抱いて来た人が「偏った部分しか認識していない自分」に

出合う体験をする。また、生々しい人の営み・人間が互いを支えようとする現場の歴史を再発見する体験に立ち会えるのは、この町にある「人を寄せ付ける力」によるものだと感じています。同時に、長きに渡り関わりと継続ができているのは、多くの人が思いと行動を「寿地区」に寄せているからであり、感謝に堪えません。

私は寿地区センターで二〇一八年より寿地区活動委員会の委員になり、二〇二〇年に専任になりました。今では寿町に住居を移すまでになりましたが、寿地区に足を運ぶようになったのは、なか伝道所に気になる人が赴任されたというなんとも極めて個人的なきっかけからでした。

二〇一七年に寿夏祭り・寿越冬にはじめて参加し、次第に寿町にある高い自治力・社会関係資本を知るようになり、それがただ単に「つながり」や「居場所」という現代人が失いつつある「豊かさ」を感じただけでなく、「神からの力がある」場所として自分の中では街がひとつの宗教施設である「幕屋」のように思えたのです。だから「寿に立つ」というより私自身は労働市場としての「寄せ場」とは意味は違いますが、この寿という「寄せ場」に寄せられ流れついたと考えています。そして、この町で「幕屋の礼拝」に招かれ、ともに歩んでいきたいと望みます。

えーとねえ

（喜来ちゃんと菊）

喜来「この花、私と同じ名前なの。だから私の妹」

私「？　どうして妹なの？」

喜来「私のは難しい字で書くと二つだけど（漢字二字の意味）
この花は一つなの」（漢字一字の意味）

喜来「だから私の方がお姉さん」

（もうすぐ4才の女児）

寿となか伝

沓澤　則子

この前、なか伝の「新来者記名ノート」を見たら、私が初めてなか伝の礼拝に出席したのは二〇〇九年三月二十一日でした。今から十三年前です。

職場が寿地区にあるのになか伝を知らず、周辺の大きな教会を訪ね歩いていました。Mさんになか伝を教わり、通い始めたのですが、仕事の中で、貧困や格差の問題、社会の矛盾を強く感じていたこともあり、それらをなか伝のメンバーと共有できることを嬉しく思いました。礼拝の後の学習会や、毎年行われていたサマーキャンプでは、世界中で起こっている戦争や差別、貧困の問題などについて、その時々の課題を学ぶ機会もありました。そして、寿公園でのバザーにボランティアとして参加するようになり、健康相談や越冬での医療班、夜回りなど、徐々に寿地区やそれ以外での活動も増えていきました。

仕事の中でも、ボランティア活動の中でも、寿や路上で出会う方々からよく聞く言葉は、「こんなところに、来たくて来たんじゃないよ」。どうして寿に来たのかを聞かせてもらうと、そこには、一人では抱えきれない困りごとや、貧困・格差の問題があって、一般社会からはじき出され、行く場所がないまま、流れ着いたところが寿町という方が多いように思います。「来たくて来たんじゃない」この言葉を聞くと、寿で活動する自分にとっては何とも寂しい気持ちになるのですが、確かにその方にとっては沢山のものを失い、孤独になり、守るものもない現実です。もし、この社会に、様々な状況に置かれた方たちに対する適切な政策があれば、路上生活をすることもなければ、寿に来なくて済んだかもしれないと思います。今は、『寿は福祉の街』と言われるようになりましたが、社会の矛盾が集約しているという意味では、以前と変わりありません。

私たちに何ができるかと考えます。路上生活を余儀なくされてきた方々、寿に住む方々と出会い、先ずはつながることが大切で、知ると社会の矛盾が見えてくると思います。そして、微力でも声を上げて行動することを続けていきたい。同時に、

縁あって寿に来た方たちが、「来てみたら悪くない」と思えるような、居心地の悪くない場所にすることができたら嬉しいです。

なか伝が寿に在って、知ることを続け、行動し、伝えることを続けていけたらと思います。

今生きている生かされている

岡安　サダ子

寿町に来て、二五年が過ぎました。今は週三日。生活の大方になっています。

忘れられないことも多々あります。年二回、一泊二日の旧青年ゼミでは沢山の事を学びました。野宿体験の夜、硬いコンクリート、冷たい北風、電車が通過する度に揺れる地面。通いなれた大通公園で突然「何している？金があり帰る家がある者に何が分かる、止めろ、帰れ！」と怒鳴られ、当事者かもしれないその人に共感し、胸が痛んだ事。

人との別れも悲しいです。順番だから仕方なかったと自分を慰めますが、障害を持った若者の急死が多いのも事実。自分の子ども達の年頃で一週間前は元気だったのに、唯、驚き、空しく力を奪われます。

嬉しかったことも沢山あります。ズボン直しをしていますが、別の町で「ズボンの人」と声をかけられた時。学童保育の子ども達から「裁縫の上手なおばさん」と呼ばれた時。素直にうれしく感じました。その子ども達とすいか割り、虫取り、夏のキャンプは懐かしい思い出です。

人々の協力的な振舞いも抜群で、署名運動の依頼では一、二週間で六、七〇名の賛同を受けています。

コロナ感染者急増の為、月一回のゆるやかに過ぎる至福の時を共有出来た「ろばカフェ」は無念の閉店。寿公園での太巻寿司作りや運動会も中止。バザーも何度も中止。

そんな中、献品された布を使って小物作りは細々と継続出来、楽しみもひとしおです。

人々の多くは先行きの見えない危機に直面しています。病を抱え苦難の生活の中で、今日、今、生きなければならない現実。今日どう生きるか？苦しくても生きていれば楽しいことがあることを知っているのだと思います。

まど

昨年度、私たちはどんな教会をめざすのかを、信徒使信やアンケートを通して考えました。その結果、多くの人が牧師を招きたいと願っていることがわかりました。ただ、牧師が信徒の依存により疲弊することがないよう、お互いひとりの人間として受容しあい、協働する関係を作りたいと願います。

四月の定期総会で、牧師招聘委員会設置が決まり、招聘計画案も共有されました。招聘委員会は毎月の準備会で具体的な相談をし、進み具合を運営委員会に報告してきました。

教会の原点は、空腹を抱えてイエスの話に聞き入る人々が、イエスと共にパンを分かち合い、励まされる、福音書の物語にあるのではと思います。ここに集い、「炊き出しの列に並ぶイエス」の姿に心を寄せる人はみな、寿の教会のなかまです。

常に途上の私たちですが、なか伝道所は個性豊かな、率直な仲間たちが真剣に向き合う場でもあります。歩みを見守り、応援してくださる皆様に励まされています。私たちと共に試行錯誤してくださる牧師が来られたらご報告しますね。

（小笠原公子）

風景

新型コロナによる礼拝中止の中で、私は仕事に追われている。

かつて一緒にホームレスをしていた仲間を何人も見かけるが、生活様式は変わり、生活保護を受けて自分の生活を楽しんでいる。

今、私の生活は大きな変化に差し掛かっている。これまで抱えてきた重大問題は解決したが、身内からは離れ、一人で生きている。

それでも教会での活動、炊き出し、バザー、夜パト等の活動を、寿で仲間と一緒に行っていて、忙しい。

大型運転者の時の厚生年金等と、B型事業所での給料で生活し、生活保護からは離れている。

最近、川崎地区にあるふれあい館を借り、歌、ギターを練習するようになった。

寿に来る前に私がいろいろな活動をした川崎地区では、今でも差別が激しい。在日の人たちとよくコミュニケーションを取り、政治、文化活動をしていた自分は、怒りを感じる。関田牧師の使信を聞いて、なおさら強く感じている。

社会問題に関する歌を作りたい。皆にヘイトスピーチに反対するデモに足を運ばせ、同じ思いの人達と一緒にライブもしたい。

（奈良光男）

「寿」とのつながり

渡辺　英俊

寿地区と私とのつながりは、四十年ほど前、横浜磯子教会の牧師だった時代に、同志の牧師たちと計って、神奈川教区の宣教プロジェクトに寿地区の問題への取り組みを入れることを提案し、発足したばかりの「ことぶき福祉作業所」の職員に、教区の支援のもと一人の教職を送り込んだことに始まります。この試みは、支援体制が不十分だったこともあって、期待通りには実りませんでしたが、そのときの遺産の一つが福祉作業所の昼食奉仕として今も残っています。また、教区として取り組み始めたことが土台となり、その後「寿地区センター」の設立につながりました。私自身も地区センターのボランティアという位置づけでその後の取り組みに参加してきました。

当初のつまづきもあって、私自身が直接現場に立たざるを得ない思いになり、一年のフィリピン留学を経て中村橋伝道所の設立と同時に、寿に通う身になりました。

伝道所を始めたとたんに、待っていてくれたような寿からの招きがありました。それがフィリピン人労働者の救援とカラバオの会の発足でした。私は一足遅れた参加でしたが、当時農伝の神学生だった三森重則さんが先に参加していて私をカラバオの会につないでくれたので、わりとスムーズに仲間入りすることができ、発足の年の秋には会の代表に選ばれました。あとはもう、激しい会の活動を追いかける生活で、全国ネットワークの結成までこぎ着けました。活動が寿に集中していきましたので、皆さんに計って伝道所ごと寿に移転したのは、ご承知のとおりです。引っ張り回したような経過になって申し訳なく思いますが、私自身が神様に引っ張り回される思いで、わたしたちの思いの先を行って導いてくださる主に感謝するばかりです。

もう一つ、私が寿の課題と深く結ばれたのは、「寿アルク」です。寿地区の大きな問題の一つがアルコール依存症ですが、治療を要する病気だということは、あまり知られていません。中村橋時代に熱心に求道しておられた方がこの病気で、簡宿の部屋で亡くなっておられたのが見つかったという、つらい経験がありました。それで、回復をサポートするデイケア・センターを、市の助成を受けて設立・運営する市民団体を立ち上げるという話があったとき、是非にと参加させていただいたのです。この団体（「市民の会　ことぶきアルク」）の副理事長を二十年務めさせていただきましたが、現場の回復プログラムは、回復者本人である指導員の方々が、頭の下がるような努力で担ってくださり、理事会は裏方のサポートです。ニーズの大きさと回復の成果が大きく、四つのデイケア・センターと一つの作業所、一つの相談センター（呼称は私の在任当時のもの）を抱える大きなプログラムに発展しました。アルコールに対して徹底的に無力であることの自覚から始めて、一歩一歩回復のステップを歩まれる方々の姿を、自分自身の信仰の歩みと重ねて多くを学ばせていただきました。

現役引退と前後して妻を送り、「一人暮らしの高齢者」になりました。介護保険の適用を受け、自立生活を維持するのが精一杯という生活になって、幾分か、寿地区に住む人たちと共通する部分ができてきたような気がします。改めて、「支援される」側の立場に置かれているのを感じ、今までもっぱら「支援する」側で歩んできた立場と較べながら、そこで感じることを見つめ、自分の歩んできた道を振り返ってみたいと思っています。

『書き遺す　神学へのメモー贖罪・文化・歴史・老いる』【増補版】

渡辺英俊著、大倉一郎編

先行本に、戦責告白、合同問題、解放の神学を含む「歴史―終末論への視点」を追加。闘い続け、今「老い」と向き合う引退牧師の省察。牧師不在状況を「新しい教会のあり方を生み出す機会に」との願いも記しつつ。（ラキネット出版）